

## 当館のカメラコレクションについて（その2）

\*豊川公裕

Kimihito TOYOKAWA

**要旨：**当館の収蔵資料として、カメラ及びその周辺資料の充実は目覚ましい。もっともそれはまだ緒についたばかりであり、カメラ全体の点数からみれば微々たるものであろう。しかし、当館にとってこれまで常設展にかかる資料収集や特別展・企画展等での収集活動に加えて、一つの特色ある収蔵資料群となりつつあり、その全容を公開して周知することは、当館の資料活用に大きく資するものと思われる。筆者は本研究報告第14号（平成19年3月）において、「当館のカメラコレクションについて」を発表しているが、小稿はその続編である。展示活動だけでなく、あらゆる機会に当館の収蔵資料が活用されるべく、その一環として小稿及び目録が活用されることを期待するものである。

**キーワード：**科学館資料 カメラ コレクション

### 1 はじめに

筆者はかつて、千葉県立現代産業科学館（以下、当館と略す）が収蔵するカメラ及びその周辺資料を広く知ってもらおうと、「当館収蔵のカメラコレクションについて」を執筆したが（1）、その内容は、平成17年度受入の小久保コレクション（一次受入分。千葉縣市川市在住の小久保勝弘氏収集）と平成18年度受入の佐々木コレクション（福井県坂井市所在の称名寺住職の故・佐々木智夫氏収集）に関するものであったが（2）、その後当時まだ整理の済んでいなかった小久保コレクションの二次受入分については紹介することができなかった。

また、平成19年2月～3月の収蔵資料展「昭和のクラシックカメラ - 佐々木コレクションから -」の開催以降、平成20年9月～12月のサイエンスドームギャラリー展示「カメラコレクション」（内容を三期に分けたミニ展示）（3）、平成21年10月～11月の開館15周年記念収蔵資料展「カメラの世界 - なつかしの名機・大衆機たち -」（以下、「カメラの世界」展と略す）と続いた当館におけるカメラ関連の展示会を通じて、当館がカメラを産業技術資料として収集・保管していることを知った見学者や一般県民の方からのカメラの寄贈申込や小久保コレクション三次受入分及び佐々木須磨子氏（故・佐々木智夫氏夫人）からの追加受入分（佐々木コレクション二次受入分）のカメラもあり、その後もカメラ及びその周辺資料の蓄積が

続いている。

そこで小稿では、既述の「当館収蔵のカメラコレクションについて」を補完することを目的とし、①小久保コレクション（二次・三次受入分）②佐々木コレクション（二次受入分）③その他のカメラ関連資料についての受入経緯・概要等を紹介することとしたい。

### 2 小久保コレクション（二次・三次受入分）について

#### （1）受入・整理経過

小久保コレクションについては平成17年度にすでに136点の資料を受け入れ済みであったが、その後も小久保氏からの資料の寄贈申込が、一次受入分の手続き終了後間もない平成17年11月から平成21年5月まで、断続的に行われている。この受入（仮預かり）の経緯は、小久保コレクションと佐々木コレクションの受入時期が重なって収蔵資料にカメラが充実してきたことにより、当館の資料収集方針にカメラ及びその周辺資料が大きくクローズアップされてきたこと（将来有望な展示ソフトとなる可能性の高まり）、小久保氏が肥大化してきた自身の収集資料の整理の必要性と当館での展示活用への積極的な協力姿勢が生じてきたこと、この両者の思惑の一致によるものと推定される。しかしながら、並行しての佐々木コレクションの整理作業に時間を要し（同コレクションに

\* 千葉県立現代産業科学館上席研究員

は古い外国製カメラが多く、その資料名特定や評価額の設定に困難を伴った)、また平成 19 年度から 20 年度に至る時期は、当館の資料収集方針の一時的変更を余儀なくされていたため (4)、その都度の整理・調査・審査・正式な受入手続きという一連の事務手続きを行い得なかった。この間、整理そのものは当館にボランティアで来られている落合昭雄氏により地道に続けられていたが、今年度に入ってようやく受入環境が整ったことと一応の整理・調査終了とが重なり、これまでの数次の受入分をまとめて二次受入分として集約することとした。ただし、一次受入分と異なり、二次受入分については小久保氏から持ち込まれた段階ではカメラ及びその周辺資料以外の種々雑多な資料が含まれており、またカメラ周辺資料ではあるものの製品のカタログや CD 等、ただちに博物館資料としてよいのか躊躇される資料も相当数含まれていた (5)。そこで、これら追加持込資料群の中からまずカメラ及びその周辺資料群だけを選別してこれを小久保コレクション (二次受入分) とし、残りをカメラ及びその周辺資料以外の産業技術資料 (当館で受け入れ対象資料として審査にかける資料) とそれ以外 (登録対象外資料) とに分類した。登録対象外資料については、寄贈申込者である小久保氏と相談の上、参考資料 (まだ歴史的な資料とは判定しづらい資料) として「保管・活用するもの」(6) とそれ以外の「返却するもの」とに分け、返却する資料については小久保氏に返却し、参考資料の今後の取扱に関しては当館の処分任せるということで小久保氏の了解を得た。

小久保コレクション二次受入分の整理手順については一次受入分に準じるので小稿では略すが (7)、小久保コレクション一次受入分の受入手続き後から数次にわたって持ち込まれた資料群を二次受入分として集約はしたものの、番号の付与順序は当館への持込順としている。そして平成 21 年 10 月からの収蔵資料展である「カメラの世界」展の開催に備え、それまでのカメラ及びその周辺資料の目録化と審査・受入手続き完了がまずは目指された (収蔵資料展開催のため、まず収蔵カメラ及びその周辺資料の活用を図ることを優先したためである)。

ところで、受入時期は二次受入分の範疇に入るものの、カメラ及びその周辺資料以外の産業技術資料についてはカメラ及びその周辺資料と区別して受入・登録することにした点は前述したが、このやり方は文書資料における文書群の一体的整理の原則からは外れるし、出所単位で整理する観点からはカメラ及びその周辺資料とそれ以外の産業技術資料も含めて小久保コレクションとすべきであろう (8)。しかし、当館では当初カメラ及びその周辺資料をもって「小久保コレクション」と設定した経緯を踏まえ、まずこの資料群で一つのまとまりとし、それ以外の小久保氏収集資料はカメラコレクションとしての小久保コレクションとは区別することにした。よって、小久保コレクション第二次受入分から除外し、なおかつ別に登録資料として受け入れる資料については、広義における小久保コレクション (小久保勝弘氏収集資料) ではあるものの、カメラ及びその周辺資料群としての狭義の小久保コレクションの対象とはなっていない。小稿では、カメラ及びその周辺資料としてどのようなものがあるかを紹介するものである。狭義の小久保コレクション (今回はその中の小久保コレクション二次受入分) としてのカメラ及びその周辺資料を紹介することとなる。その整理結果は別紙資料①の目録 (一覧表) のとおりである。

以上に加えて、今年度 (平成 21 年度) はさらに小久保コレクションの三次受入分ともいべきカメラ 4 点も受け入れている。この契機は、「カメラの世界」展の開催にあたって小久保氏から借用したカメラのうちの 2 点 (「ミノルタ α7000」「ソニー・デジタルマビカ MVC-FD7」) (9) に、新たに「フォトラマ 90 エース」「写ルンですフラッシュ」(ともに富士写真フイルム製。「写ルンですフラッシュ」はレンズ付きフイルム) の 2 点を加えた寄贈申込が、展示会終了直後に小久保氏からあったことによる。第二次受入分を受け入れて半年程度後のことではあったが、小久保コレクションの継続的蓄積を図る上で有益と判断されたことから、同一年度ながら二度に分けて小久保コレクションを受け入れることとなったわけである。第三次受入分の目録は別紙資料②である。

当然ながら、二次受入分と同様に三次受入分も、今後の管理上は一次以降の小久保コレクションとして一体化した資料群とみなして管理・活用することとなる（ただし、登録番号は年度単位であるので一次受入分と二次受入分は連続しない。保存容器も現時点では区別している）。

## （2）小久保コレクション（二次受入分）の概要

小久保コレクションの二次受入分は全126点である。内訳は、カメラが46点（レンズ付きフィルム3点を含む）、レンズフィルター24点、カメラレンズ関連資料9点、シャッター関連資料1点、フィルムホルダー関連資料5点、フラッシュ（ストロボ）及び発光器関連資料5点、カメラ販売促進関連資料5点（ポスター含む）、フィルム及びフィルム容器関連資料3点等が主なもので、そのほかに8mmシネカメラ関連資料が映写機や編集機等12点残されている。中でもレンズフィルターはよく使われるUVカットや色補正用のものにとどまらず、スノークロスフィルター（美しい光のアクセントを作り出す）やミラージュフィルター（1つの被写体を複数映し出す。写真1）、センターフォーカスフィルター（中心部分を明確にして周辺部をぼかす）等のプロまたはハイアマチュア用のフィルターも含まれていて多彩である。



写真1 ミラージュフィルター (番号: 200903082)

二次受入分におけるカメラの集積状況は、第一次受入分とはやや趣が異なる。全体としては1980年代の35mmコンパクトカメラ（35mmレンズシャッターカメラ。以下、コンパクトカメラと略す）を中心とし、一次受入分よりも比較的新しいカメラが多い。ほとんどは国産カメラで、外国メーカーのカメラは、イーストマン・コダック社（米国）

のレンズ付きフィルム「おもしろカメラ・パノラマ」の2機種（撮影枚数が異なる）とイカ社（独）のステレオカメラ「ポリスコープ」の3点のみである。収集カメラのメーカー別トップ3は次のとおりである。

- |              |      |
|--------------|------|
| 1. オリンパス光学工業 | 10点  |
| 1. 富士写真フィルム  | 10点※ |
| 3. キヤノン      | 8点   |

※) レンズ付きフィルム1点を含む。また、「ポケットフジカ・フラッシュ」は同一機種の色違いも各1点として計上（同一色のカメラのダブリ1点も含む）。

一次受入分と合算すると、1位が富士写真フィルムの20点、2位がキヤノンの19点、3位がオリンパス光学工業の15点となる。いずれも、そのほとんどはコンパクトカメラであり、この点では一次受入分と同じく二次受入分においても「大衆機と呼ばれるカメラが大好きで収集してきた」という小久保氏の収集意図がよく反映されている(10)。

個別に見ていくと、まず気づくのは「オリンパスペン」シリーズ（以下、「ペン」シリーズと略す）が6点とまって残されていることである。「ペン」シリーズは、1959年の初代「ペン」の発売開始以来、1981年発売の「ペンEF」まで20機種（一眼レフの「ペンF」シリーズを含む）(11)が製造・販売され、累計1,700万台も売れたというわが国の1960年代に35mmハーフ判（35mmフィルムの24×36mmフレームを24×18mmとした経済的フレームとしたもの）の流行を生み出した大ヒットしたカメラシリーズである(12)。当館にはすでに佐々木コレクションに4機種、小久保コレクション（一次受入分）に2機種存在しており、一部ダブる機種はあったものの、二次受入分により9機種が揃うことになった。手軽に持ち運びでき、すぐ取り出して写せるお手頃価格のサブカメラというコンセプトで登場した初代機以降、その時々ニーズを取り込みながら発展していった「ペン」だが、二次受入の結果、当館に残る「ペン」シリーズを発売年順に列記すると次のとおりである。

- 1) ペンEE (1961年) (写真2)
- 2) ペンEES (1962年)
- 3) ペンD (1962年) ※1

- 4) ペンF (1963 年) (写真3)
- 5) ペンFT (1966 年) (佐々木コレクション)
- 6) ペンEED (1967 年)
- 7) ペンEES - 2 (1968 年)
- 8) ペンEE - 3 (1973 年) (佐々木コレクション)
- 9) ペンEF (1981 年) (佐々木コレクション)

※1) 佐々木コレクションや小久保コレクション (一次受入分) 及び西博孝氏寄贈分にも各1点ずつ残されている。

※2) 小久保コレクション (一次受入分) にも残されている。



写真2 オリンパスペンEE (番号: 200903100)



写真3 オリンパスペンF (番号: 200903075)

20 機種の中の9機種であるから、もちろんこれで十分揃っているとはいえない。しかし、現在収蔵分だけでも、カメラの技術的發展の一端を顧みることが可能である。残念ながら初代機は未収蔵だが、1) は世界で初めて本格的なEEカメラ (自動露出カメラ。EE=Electric Eye のことで、のちにAE=Automatic Exposure という言葉に取って代わられる) として「オリンパスオートアイ」を世に出したオリンパス光学工業が、その技術を「ペン」シリーズに応用した機種である。露出計はレンズ周りに配されたセレン式のものであり

(サークルアイ)、この頃のセレン式EEカメラによく見られるスタイルである。2) は1) のセカンドカメラとしての割りきった単速シャッター (1/60 秒) を二速 (1/30 秒及び1/250 秒) の切替式とし、絞りとの組合せによるプログラム式EEとした機種。これにより、これまで対応できなかった環境下 (例えば1/60 秒では露出不足になる暗い場所や露出過多になる明るい場所) での撮影も可能となった。3) は「ペン」の成功で発売が相次いだ 35mm ハーフ判の世界の中での差別化を図るために、レンズの大口径化や高速シャッターの搭載 (1/500 秒) 等、構成部材を高級化 (デラックス化。「D」はその頭文字) した機種。セレン部はレンズ上部に移動している。4) はさらに当時のユーザーサイドから要望が強かった「ハーフサイズをメインカメラとして使う」ために、一般的なペンタプリズムではなく小型カメラの形態を維持するためのポロプリズムという独特の反射方式によって一眼レフ化を果たした機種である。5) は「ペンF」に1960年代後半から普及してきたTTL (Through The Lens。撮影レンズを通った光を測定して露出を決定する方式) 露出計を内蔵した機種で、6) は大口径化を果たした「ペンD」の流れを受けつつそのEE化を実現した機種。7) は「ペンEES」のフィルムカウンターを自動化し、ホットシューの取り付け等を施した「D」の路線とは別の普及版改良化路線に位置づけられる機種。また8) はレンズを固定焦点のF3.5 として機能を抑える一方、専用フラッシュの使用により、フラッシュマチック (外付けのフラッシュ撮影に適した自動絞り調節) を実現した機種であり、9) は「ペン」シリーズ最終機で、フラッシュを内蔵した機種である。

このように見ると、「ペン」シリーズ一つをとっても、カメラの発展は複線的であることがわかる。初代機に続く1) を起点に、2) →7) →9) との技術的發展の流れがまず確認できる。そして4) →5) は1) を起点とする流れとは違う発展系統である。また3) は1) とは違うコンセプトのカメラではあるものの、6) によって1) からの流れ (EEカメラ) と合流している。また単純に発展するというより、マーケティングの関係で、

機能を落として価格を抑える8)のような動きも見られる。こうして見ると、1960年代のカメラへの技術投入の経過が「ペン」シリーズにも反映されているといいであろう。

次に、二次受入分に比較的新しいカメラが多い中、特異なのはドイツのイカ社製「ポリスコープ」(写真4)の存在である。調査当初は発売年が不明であったが(13)、日本カメラ博物館に調査を依頼したところ、1911年から製造・販売されていた機種であることがわかった。これによりこの「ポリスコープ」が現時点で当館収蔵カメラの中で最も古いカメラとなっている。外観からわかるとおり、撮影レンズが二つあるステレオカメラであり、当時写真を立体的に見ることができるステレオ写真が流行していたことを物語る資料である(14)。なお、このカメラは小久保氏と交流のある医師の方(カメラのコレクターでもある)から譲ってもらったというものであり、このような第三者から小久保氏の手に入った資料が小久保コレクションの一部を構成していることも付言しておきたい。



写真4 ポリスコープ (番号: 200903048)

このように小久保氏が他者から譲り受けたカメラには、東京都江戸川区の写真館経営者からの「[組立暗函]」も該当する(写真5。[ ]書きは商品名を表記できなかったため。他のカメラ名と区別するため包括的な名称を入れた)。このカメラは、横木製作所という個人事業所が製造した木枠ボディの蛇腹付きカメラ(レンズは別メーカーのものを取り付ける)であり、写真館(スタジオ)や観光地での団体撮影等で主に用いられたカメラである。横木製作所はその業界では有名な事業所のようにあるが(15)、旧蔵者の写真館主はこのカ

メラを直接横木製作所から入手したとのことである(16)。古さを感じさせる外観ではあるものの、入手時期は昭和50年代と比較的新しいカメラであり、この点は筆者としても意外であった。また、通常この手の写真館向け暗函カメラは、専門の卸問屋を経由する流通ルートで販売されるようであるが、このような直販による入手は珍しいようである(17)。当該資料のレンズは取り外されているものの、写真館等で使用された蛇腹付きの伝統的スタイルをとどめる暗函カメラが昭和50年代まで新規に製造され、写真館で使用されていたことは興味深い事例といえよう。フィルムホルダーも複数残されており、保存状態も悪くない。



写真5 [組立暗函] (番号: 200903051)

このほか、一般には出回りにくいカメラ店の店頭デモンストレーション用のスケルトンカメラ(内部の構造がわかるようにボディ外装を透明なプラスチック製としたモデル)として、「ペンタックス・ズーム60」がある(写真6)。このカメラ(実用カメラではないので、前出の分類ではカメラ販売促進関連資料とした)に関しては、製品



写真6 ペンタックス・ズーム60(スケルトンモデル) (番号: 200903042)

(商品)としての「ペンタックス・ズーム60」(番号:200903016)もコレクション内に残されており、同一資料で製品と内部構造のわかる比較資料が存在することは、展示展開上有益なものといえよう。通常は分解した状態でしか見ることのできない筐体内部の配線やプリント基板の設置状況をカメラの外観とともに確認することができ、カメラの製造技術を視覚的に伝える展示物として有用な資料といえる。

1980年代のカメラが多いだけに、二次受入分のカメラ構成を見ていくだけでも、その年代にどのようなコンパクトカメラが出回っていたのかが次のように概観できる。

- ①二焦点式やズームレンズ搭載のAF (Auto Focus) カメラの普及(「オートボーイ・テレ・クォーツデート」「リコーTF-500D」「ニコンTWズーム・クォーツデート」等)
- ②デート機能搭載の一般化(「ミノルタハイマチックAF-D」「ヤシカL・AF-D」「オリンパスAM-100クォーツデート」等)
- ③防水機能付きカメラの登場(「オリンパスAF-1クォーツデート」「フジHD-M」等)
- ④使い捨てカメラ(レンズ付きフィルム)の登場(「フジカラスーパー100HR」)(18)

以上の趨勢は別々に発展したのではなく①と②、または②と③を兼ねていたり複合的な要素もある。しかし④は従来のカメラのあり方を根本的に変えたもので、わが国においてカメラの機能をただシャッターを押すだけに特化し、目的地にまで持ち運ぶ手間を省いていつでも低価格に代替カメラ(レンズ付きフィルムは、分類上はカメラには属さない)を入手できる分野を切り開いた製品である。カメラメーカーが思いつくアイデアというより、感光材メーカーでもある富士写真フィルムらしい感光材(フィルム)の消費拡大を第一義とした新戦略商品といえよう。この分野の進化は、他の感光材メーカーも類似商品を発売する一方、富士写真フィルムでも「写ルンですHi」(使用フィルムを110フィルムから35mmフィルムに変更)や「写ルンですフラッシュ」(内蔵フラッシュの搭載)等と機能の向上を遂げ、「カメラ」の市場開拓と大衆化に大きく貢献している。この点に関

しては、「ラピタカメラ」という珍しい資料も残されている(写真7。写真では紙製外装を外したレンズ付きフィルムが中に収められている)。「ライカM3」に似た外観で、中にレンズ付きフィルムを収納する一種のカメラカバーである。「ライカ」で写真を撮るような感覚でレンズ付きフィルムの写真が撮れるという一種のアクセサリーであり、こういう商品の存在は、カメラをいかに楽しんで撮るかという撮影者のカメラに対する向かい合い方の変化、関心の広がりを示す資料といえる。このカメラカバーは、小学館の発行した『ラピタ』という雑誌の創刊2周年を記念して応募当選者に配布したものであるが、その後販売もされたようである(19)。



写真7 ラピタカメラ(番号:200903023)

1980年代の流れを受け、その後の1990年代に入ると「ミノルタP's」「カルディア・トラベルミニ・デュアルP」等のようにパノラマカメラ(35mmフィルムの上下をトリミングして横長のパノラマサイズの写真を得た)が流行した。パノラマサイズは新しい発想のフォーマットではないが(20)、コンパクトカメラでパノラマ写真を撮れる時代が来たということは、フィルムの画質が向上したことにより、フォーマットが小型化してもその引伸ばした写真が観賞に耐えられるようになったということである。こうして「よく写る」「誰でも撮れる」「情報(日付)の記録」「堅牢性の向上」といったカメラ(フィルムカメラ)に求められる直線的な進化の一方、カメラの入手のしやすさや遊び心の投影、撮れる写真の多用化等、デジタルカメラの普及を前にしてフィルムカメラ(銀塩カメラ)はこの頃に発展の絶頂を迎えたといえ

よう。その延長上にAPSカメラの展開がある。

カメラが身近な工業製品となって以降、さらに人々に受け入れられるにはどうすればいいのか。多様化が求められる中で似たような機能の付加（デート機能搭載やパノラマ撮影機能）が横並びで見られたことは、写す道具であるカメラという製品の広がりを考える上で、一定の限界を示すものともいえる。それにしても、一般大衆に身近なコンパクトカメラが広く流通していったことで、その機能やデザイン等がカメラの変遷に残した足跡は大きいものと言わざるを得ない。クラシックカメラとしての市場価値からすれば低廉な部類のコンパクトカメラの分野にこそ、どのようなカメラが消費者（購入者）から求められていたのか、その時代のカメラの趨勢を直接的に探ることができる。単線的でないカメラの発展過程を把握することにより、カメラの歴史及びわが国のカメラ開発のあゆみをより重層的に捉えることができるであろう。デジタルカメラ全盛の現在、フィルムカメラにおける「ネオ・クラシックカメラ」とでもいべきカメラ、特にコンパクトカメラの価値を、今や評価すべき時期にきているのかもしれない。

カメラ以外で興味深い資料としては、インスタントカメラである富士写真フィルムの「フォトラマFP-U L」（1992年発売）用の「コンバーターR」（番号：200903045）（写真8）と「コンバーターC」が挙げられる。前者は運転免許写真用で後者は就職・受験写真用のコンバーターレンズ（交換レンズ）である。つまり「フォトラマFP-U L」とは、各種証明写真専用の業務用インスタントカメラであり、その目的とする写真を撮影する



写真8 フォトラマFP-U L コンバーターCと容器 (番号: 200903046)

ための専用レンズというべきものが存在するわけである(21)。インスタントカメラの用途の広がりを示す資料だが、現時点で収蔵資料に「フォトラマFP-U L」本体が含まれていない点が悔やまれる。

### (3) 小久保コレクション（三次受入分）の概要

前述のとおり、4点のうち2点は当初「カメラの世界」展で借用したカメラであった。

「ミノルタα7000」（写真9）は、35mm一眼レフの開発が世界をリードするわが国のカメラ大国への道を決定付けていく過程において(22)、そのAF化時代の到来を告げた画期的製品であった(23)。ボディー内部にAF機構（レンズ駆動用モーター）を組み込み、交換レンズが全てAF対応となったシステムカメラの元祖機であり、その爆発的にヒットで、それまで「一部マニアのための難しそうカメラ」といわれた一眼レフカメラを「誰でも簡単に綺麗な写真が撮れる万能カメラ」に転換させたカメラ(24)としてカメラ史に残るカメラであろう。なお、当該資料は若干汚損が見られるのが惜しい。



写真9 ミノルタα7000 (番号: 200903134)

また「デジタルマビカMVC-FD7」は、当館のコレクション資料がフィルムカメラ中心のクラシカルなカメラ中心にならざるを得ない中、デジタルカメラを展示するにあたって興味深い資料である(写真10)。デジタルカメラであるにも関わらず、記録媒体が前身の電子スチルビデオカメラ時代と同じ3.5インチフロッピーディスクを使用していたという点で、アナログ式とデジタル式の橋渡しの役割を担ったカメラといえよう。当館としては、カメラ製品としてのみならずエレク

トロニクス製品としてのデジタルカメラの収集に今後注意をはらう必要があるかと思われる<sup>(25)</sup>。



写真10 デジタルマビカMVC - FD7 (番号: 200903135)

以上に加え、「フォトラマ90 エース」は普及版インスタントカメラではあるものの<sup>(26)</sup>、当該資料ならではの特徴として裏蓋下部に「創刊20周年集英社文庫下半期チャレンジセール入賞記念」のシールが貼付されており、出版社である集英社からの景品として入手されたカメラであることがわかる(集英社文庫は1977年に創刊。なお外箱に値段が付いていることから、小久保氏自身が景品として入手したものではない)。その意味ではカメラの入手経路が購入や収集に限らない一面を覗かせる好資料といえるものである。

また「写ルンですフラッシュ」は、「フジカラースーパー100HR(初代の写ルンです)」「写ルンですHi」に続く第三弾レンズ付きフィルムである<sup>(27)</sup>。すでに初代と2代目「写ルンですHi」とをすでに小久保コレクション(一次及び二次受入分)により収蔵していた当館にとって、それに続くレンズ付きフィルムの収蔵は、初期の段階的発展を続けるレンズ付きフィルムの系統的収集につながるものである。「カメラの世界」展では、この初代と「写ルンですHi」を展示したが、懐かしがる見学者も多く、解説ツアーでも「これに続けて内蔵フラッシュ付きのものが登場して…」とよく説明していたので、「写ルンですフラッシュ」を加えてシリーズ草創期の3点が揃えば展示効果をさらに増やすことが期待できる。当該資料はすでにフィルムが抜き取られ、そのためパッケージ(紙製の外装)も剥離された状態であったが、小久保氏了解のもと、その剥離部分を再び糊付けして外

観上は展示資料として全く遜色がない状態とした。

こうして今年度(平成21年度)は、小久保コレクションに関して、二次受入分と三次受入分とを併せて合計50点のカメラ及びレンズ付きフィルムを新たに収蔵することとなったわけである。

### 3 佐々木コレクション(二次受入分)について

#### (1) 受入・整理経過

佐々木コレクションについては平成18年度に279点の資料を受け入れ済みであり、そのうちの223点がカメラであった。戦前のドイツ製カメラが多いことや二眼レフカメラやスプリングカメラといった比較的クラシカルなカメラが多いこと等、その概要については小久保コレクション(一次受入分)同様すでに前出の拙稿「当館のカメラコレクションについて」で報告したとおりである。

ところで、平成21年度は「カメラの世界」展を開催するため、当館収蔵の佐々木コレクションと小久保コレクションを中心に、主に昭和以降のカメラの歴史について紹介するために個々のカメラの位置付けを試みたが、佐々木コレクションを活かすにはドイツ製カメラの展示は避けては通れなかった。そしてドイツ製カメラを展示の中で活かすには、戦前から戦後にかけてドイツ製カメラがわが国のカメラ産業の常にお手本であったことを伝える必要がある<sup>(28)</sup>。この場合、わが国のカメラファンにとって憧れのドイツ製カメラの最高のブランドが「ライカ」であることは言を俟たないであろう<sup>(29)</sup>。幸い、佐々木須磨子氏が「ライカ」12台を引き続き所蔵していたことから、それを一式借用することで展示内容をさらに魅力あるものとするのが期待できた(「ライカ」12点も故・智夫氏収集のコレクションの一部を構成していた資料である)。須磨子氏の御厚意により、「バルナック型」2機種、「M型」7機種、「R型」3機種の合計12点の「ライカ」<sup>(30)</sup>を展示できたことは、展示内容に厚みを持たせることができ、見学者の評判も上々の成果を得た。

これらの「ライカ」は、展示終了後は返却の予定で日程調整をする予定であったものの、借用の段階から須磨子氏から「できれば貴館でそのまま活用していただきたい」という要望が出されてい



たこともあり、改めて須磨子氏の意向を確認して館内で検討した結果、佐々木コレクションと一体化した収蔵が本来の智夫氏収集コレクションの全容に近づくということもあり、二次受入分として整理・収蔵することとなった。整理経過については、これも拙稿「当館のカメラコレクションについて」に記した一次受入分（当時は二次受入を想定していなかったため、特に一次受入分とは断っていない）に準じるので、小久保コレクションの追加受入分と同様に小稿では略す。なお、整理にあたっては、カメラ借用の際に特に保管場所の位置関係に意味合いはなかったため、登録番号は編年順に付与している。その目録（一覧表）は別紙資料③のとおりである。そして佐々木コレクション二次受入分も、小久保コレクションと同様、今後は一次・二次を一体化した資料群として管理・活用することになる。

## （2）佐々木コレクション（二次受入分）の概要

全て「ライカ」である。ここでは各型別に各機を紹介する。

### ①バルナック型ライカ（2機種）

「ライカ」を世に出したエルンスト・ライツ社の技師・オスカー・バルナックの名を冠したタイプ（型）で、「ライカ」の最も古い型である。現在につながる35mmカメラの祖、または近代カメラの祖とされる「ライカI（A）」<sup>(31)</sup>（1925年発売）以降、I・II・III型に分かれ、II型から連動距離計の増設、III型からは低速度シャッター（1/20秒未満）の組込が行われるようになった。それぞれの型はさらに細分化され、バルナック型ライカの各機種の発売開始年順に列記すると以下のような<sup>(32)</sup>（年号は発売開始年）。クラシカルな外観をとどめ、「ライカI（C）」（1930年）以降はレンズ交換式のシステムカメラの元祖ともなった型であり、これ以降はネジ式のスクリュウマウントという点が各機の共通点となっている。

- 1) ライカI（A）（1925年）
- 2) ライカI（B）（1926年）
- 3) ライカI（C）（1930年）
- 4) ライカII（1932年）
- 5) ライカ・スタンダード（1932年）
- 6) ライカIII（1933年）

- 7) ライカIIIa（1935年）
- 8) ライカ250（1933年）
- 9) ライカIIIb（1937年）
- 10) ライカIIId（1939年）※1
- 11) ライカIIIc（1940年）※2
- 12) ライカIIc（1948年）
- 13) ライカIc（1949年）
- 14) ライカ72（1950年）
- 15) ライカIIIf（1950年）
- 16) ライカII f（1951年）
- 17) ライカI f（1952年）
- 18) ライカIIIg（1957年）
- 19) ライカI g（1957年）

※1) ただし各機種を説明している片山良平氏は「1939年度版の『カタログ』には本機とIIIc型とが併記されていたが、次版の『カタログ』では、IIIc型のみとなっている。」と記しており、そうすると「IIIc」も1939年には発売開始されていたことになる。

※2) 「IIIc」には戦中型（1940年）と戦後型（1945年）とがある。そうすると、1939年製の「IIIc」は戦中型の前の型と捉えることもできるが、片山氏はそのことについては説明していない。

もっとも、バルナックが試作したという「ウル・ライカ」（非売品）も含めれば、1913年にまで遡る型であるが、佐々木コレクションには上記のうちの「ライカIII f」と「ライカIII g」（以後、「ライカ」名は省略）とが収蔵されている。

整理上、複数年にわたって製造・販売されたカメラについてはその当該カメラがどの年に製造されたカメラであるのか不明であるため（購入年から推定することはできるが、収集資料となると二次入手となるので不明になりやすい）、発売開始年をもって当該カメラの製造年（発売年）として記録することが一般的であろう。しかし、「ライカ」の場合はそのシリアルナンバーからより正確な製造年を把握することが可能である。

佐々木コレクションの「III f」（写真11）はシリアルナンバーにより1956年製のものである。「III c」にフラッシュ同調機構を付加した1950年発売開始の「III f」ではあるが、当該資料は1954年以降のセルフタイマー内蔵モデルであり、「III f」の後期型に属するタイプということになる。

この「Ⅲ f」のように、工業製品の場合は同名資料であっても小改造（機能追加や省略）が施されて性能や外観が異なる場合がある。外観から改造前後を推測することも可能であるが、シリアルナンバーにより年代の特定が明白となる点は、資料整理上有益である。なお、当該資料には外付けのファインダーが取り付けられており、外観上に大きなアクセントを与えている。レンズは鏡胴部が伸縮する「エルマー35 mm F 3.5」を装着している。



写真11 ライカⅢ f (番号: 200904005)

同じように見ると、「Ⅲ g」(写真 12) は 1957 年製である。つまり発売開始年の製品である。エルンスト・ライツ社は既に M 型の「ライカ M3」を 1954 年に登場させており、バルナック型は過去のモデルとなっていたものの、「Ⅲ g」はその M 型の技術を取り入れたバルナック型の最終進化形である(最終モデルは同年やや遅れて登場した「Ⅲ g」を簡略化した「I g」だが、進化形とはいえない。なお「I g」は系統的には「I f」の後継機となる)。「M3」により取り入れられたレンジファインダーカメラの弱点を補うパララックス(視差)自動補正機構を備え、「Ⅲ f」までとは異なる大きな対物窓を設けている(向かって右隣に位置する小さな四角い窓は明かり取り窓)。なお、レンズは「キヤノンレンズ 50 mm F 1.2」という大口径レンズを装着しており、当該資料のように、佐々木コレクション内の「ライカ」には、故・智夫氏の入手時にはレンズが付いていなかったのか、またはすでに当該レンズのような後付けレンズが付いていたのかは不明ではあるが、バルナック型ライカのスクリーマウントに適合する純正品ではないレンズが便宜上取り付けられたと推定され

るカメラがいくつか見られる。



写真12 ライカⅢ g (番号: 200904006)

## ②M型ライカ(7機種)

1954 年のドイツのフォトキナで発表された「ライカ M3」は全世界に衝撃を与えた名機で、当時のカメラ技術の頂点を示すとともに、日本のカメラメーカーがそれまでの「ライカコピー」から脱して一眼レフの分野に技術を傾注した契機を与えたカメラともいわれ、カメラ史に与えた影響は大きい(33)。M 型の名は、messsucher(メズスハー)の頭文字からきたもので、距離計ファインダーを意味するといひ、M 型の初代機が「M3」なのは、レンズに合わせて 3 つの撮影枠が表示(ブライトフレーム)される特長を示しているからという(34)。この M 型では、レンズマウントをこれまでのネジ式のスクリーマウントを着脱がワンタッチで対応できるバヨネット式に変更されている(Mマウント)。さらにフィルムの出し入れがしやすい裏蓋開閉式となり、巻上げレバーもバルナック型のつまみ式から操作しやすいレバー式とする等、これまでの「ライカ」から大きく改良された。レンジファインダー(距離計内蔵)カメラの最高峰のシリーズとされる M 型ライカの各機種の発売開始年を列記すると以下のようなものである(35)。

- 1) ライカ M3 (1954 年)
- 2) ライカ M2 (1957 年)
- 3) ライカ M1 (1959 年)
- 4) ライカ MD (1963 年)
- 5) ライカ M4 (1967 年)
- 6) ライカ MDa (1966 年)
- 7) ライカ M5 (1971 年)
- 8) ライカ CL (1973 年)

- 9) ライカM4 - 2 (1978年)
- 10) ライカMD - 2 (1980年)
- 11) ライカM4 - P (1981年)
- 12) ライカM6 (1984年)
- 13) ライカM6 TTL (1998年)
- 14) ライカM7 (2002年)
- 15) ライカM8 (2006年)
- 16) ライカM8 - 2 (2008年)
- 17) ライカM9 (2009年)

佐々木コレクションには、「M3」「M2」「M1」「M4」「M5」「M6」、そして「CL」が残されている。M型ライカの基本的なラインは押さえてあるといえよう（「M7」以降は智夫氏の逝去もあって未収集）。なお、名称の数字の変遷については、「M2」「M1」はスペックが簡素化されて普及版化していく流れであり、「M4」以降は改良・発展系の後継機としての流れになっている。

「M3」はほぼ等倍の鮮明なファインダーに50・90・135mmの各ブライトフレームを内蔵し、レンズ交換による視野の変化にファインダーが対応するようになっている。一軸不回転式のシャッターメカニズム等も当時としては先進的なものであった。コレクション内の「M3」（写真13）は、シリアルナンバーにより後年の1963年製であり、1954年製にはなかったフレームセレクトレバーが付いている（36）。レンズは「ズミクロン50mmF2」を装着したものである。



写真13 ライカM3 (番号: 200904009)

「M2」は「M3」のコストダウン機で、距離計が簡略化され、ブライトフレームは当時の使用者の需要に応じて35・50・90mmのものに変更されている（そのためファインダー倍率は「M3」の

ほぼ等倍の0.91倍から0.72倍に下げられた）。採光窓はフラットな表面から溝の付いた表面に変更され、自動リセットであったフィルムカウンターが手動式に簡易化されている。コレクション内の「M2」（番号: 200904007）は1958年製で、レンズは「M-ロッコール40mmF2」を装着したものである。また「M1」は「M2」からさらに距離計を除いた機種であり、コレクション内の「M1」（番号: 200904008）は1962年製で、レンズは「キヤノンレンズ28mmF2.8」を装着したものである。

「M4」は「M2」の発展・改良型とされている。つまり、「M3」を簡略化した「M2」の後継機というわけである。フィルムカウンターが「M3」と同じく自動リセット式に戻り、巻戻しノブはクランク式に変更されて操作性は一層向上した。外観上の特徴的な変化は、向かって右上に斜めに配置されたその巻戻しクランクであろう。またこれまで取り外し式だったフィルムの巻取りスプールをボディーに固定したことで、それまで煩雑であったフィルムの装填方式が容易になった。以降のM型モデルはこの「M4」が基本形になるとされる。コレクション内の「M4」（写真14）は1969年製であり、レンズは「エルマー50mmF2.8」を装着したものである。



写真14 ライカM4 (番号: 200904011)

「M5」は、「ライカ」初のTTL露出計内蔵機であるとともに、世界初のTTL露出計内蔵のレンジファインダーカメラでもある。TTL露出計は1960年代に開発が進み、主に一眼レフカメラの分野において急速に普及していったが（37）、ようやくこの技術が「ライカ」にも取り入れられた。露出計内蔵により従来の「ライカ」より一回り大

きく、幾分角ばったボディーもこれまでのM型ライカとの外観上の差異を強調するものとなっている。コレクション内の「M5」(写真 15) は 1973 年製で、レンズは「ズミクロン 35 mm F 2」を装着しており、これはカナダ・ライツ社製のレンズである。シリアルナンバーの位置はホットシューに刻印されており、この配置はその後の「CL」「M6」にも受け継がれている。



写真 15 ライカM5 (番号: 200904012)

次に「CL」だが、これは周知のとおり、当時高性能ながらも比較的安価なわが国の 35 mm 一眼レフの攻勢で低迷し、財政危機にも陥っていたエルンスト・ライツ社が、日本のミノルタカメラ(現コニカミノルタ)との提携で製造した TTL 露出計内蔵のコンパクト・レンジファインダー機である。日本国内では「ライツ・ミノルタ CL」として販売されたカメラでもあり、「M5」をコンパクト化(「CL」とは、Compact Leica または Compact Light-Weight の略という)した M 型ライカである(38)。ローコスト化が図られ、ここにミノルタのノウハウが発揮されている。シャッターは独特の縦走り式になっていて、ボディーは全てブラック・クローム仕上げになっている。コレクション内の「CL」(番号: 200904013) は発売開始年の 1973 年製であり、レンズは「キヤノンレンズ 50 mm F 2」を装着したものである。

そして「M6」であるが、「M5」と同じく TTL 露出計内蔵機ではあるものの、外観は「M4」に戻ったかの感がある。内蔵の TTL 露出計はエレクトロニクス化が進み、28・35・50・75・90・135mm 用の各ブライトフレーム(39)を備える。軍艦部には新たに亜鉛ダイカストを使用し、1988 年

の会社組織の変更によりロゴも上面の「Leitz WETZLAR」から前面の赤丸に白抜き「Leica」に変わっている。コレクション内の「M6」(番号: 200904016) は 1985 年製で全身ブラック・クローム仕上げのボディーであり、外部取り付けのユニークなアクセサリースューを付属させている。レンズは「ノクチルックス - M50 mm F 1」という大口径レンズを装着している。なお、「M6」にはほかに軍艦部がシルバー・クローム仕上げの「M6」もあるが、発売当初は当該資料のようにブラック・クローム仕上げのみだったようである。

## ②R型ライカ (3機種)

1964 年に登場した「ライカフレックス」を初代機とする一眼レフシリーズを R 型ライカとっている。既に「ニコン F」や「キヤノンフレックス」「アサヒペンタックス」等の日本製一眼レフが世に出てきた後であり、レンジファインダーにこだわった「ライカ」がようやく一眼レフ分野にも進出してきたことを象徴するカメラであった。この R 型ライカの発売開始年を列記すると以下のようである(40)。

- 1) ライカフレックス (1964 年)
- 2) ライカ SL (1968 年)
- 3) ライカ SL - MOT (1972 年)
- 4) ライカ SL 2 (1974 年)
- 5) ライカ SL 2 - MOT (1975 年)
- 6) ライカ R 3 (1976 年)
- 7) ライカ R 4 (1980 年)
- 8) ライカ R 4 s (1983 年)
- 9) ライカ R 4 s mod. 2 (1985 年)
- 10) ライカ R 5 (1986 年)
- 11) ライカ R 6 (1988 年)
- 12) ライカ RE (1990 年)
- 13) ライカ R 6. 2 (1992 年)
- 14) ライカ R 7 (1992 年)
- 15) ライカ R 8 (1996 年)
- 16) ライカ R 9 (2002 年)

佐々木コレクションには、「ライカフレックス」「R 3」「R 4」が残されている。

「ライカフレックス」は外部測光式(受光素子は CdS)の露出計を内蔵し、ファインダー中央部のマイクロプリズムによる焦点調節機構を搭載

している。1/2000 秒の高速シャッターも追加された。受光窓と並ぶ電池室の存在が本機の外観上の特徴といえる。コレクション内の「ライカフレックス」(写真 16) は 1965 年製であり、レンズは「エルマリート - R35 mmF2.8」を装着。フィルムカウンターが扇型の白抜き数字表示であり、この特徴から前期型に属する機種である（後期型はフィルムカウンターが「M3」のような丸型になる）。



写真 16 ライカフレックス (番号: 200904010)

「R3」は、TTL 絞り優先式 AE の一眼レフカメラで、ベースとなったのは「ミノルタ XE」(1974 年発売の 35 mm AE 一眼レフ<sup>(41)</sup>) だが、中央部重点測光方式の採用や測光モードの選択、軍艦部等の素材の変更等、独自色も見られた。コレクション内の「R3」(写真 17) は 1973 年製で、レンズは「ズミルックス - R50 mmF1.4」を装着したものであり、底部の刻印からポルトガル工場での製造であることがわかる。またシリアルナンバーの位置は背面底部に刻印されている。



写真 17 ライカ R3 (番号: 200904014)

最後に「R4」だが、この機種は「ライカ」初のマルチプログラム自動露出機構を搭載した一眼

レフである。開発にあたっては、シャッター速度優先と絞り優先の両方の露出モードの選択を可能とした「ミノルタ XD」(1977 年発売の 35 mm AE 一眼レフで、「XE」よりも小型で軽量<sup>(42)</sup>) をベースとしており、円弧を描いた一体成型のペンタプリズム部は優美なデザインとの評価がある。コレクション内の「R4」(写真 18) は 1981 年製で、レンズは「ズミクロン 50 mmF2」を装着しており、ボディーの刻印から当該資料もポルトガル工場で製造されたものであることがわかる。



写真 18 ライカ R4 (番号: 200904015)

それにしても、1970 年代後半の R 型ライカは、ミノルタカメラという提携先を得て、その技術的協力のもとに製造されていたことやポルトガル製ライカが出回っていたこと等、新しい「ライカ」への模索の時代を象徴したカメラ群といえよう。

#### 4 その他のカメラコレクション

佐々木・小久保両コレクション以外で当館が収蔵する博物館資料としての登録カメラは別紙資料④のとおりである。「オリンパスペン D」や「ミノルタベスト(ミノルタヴェスト)」のように佐々木コレクションや小久保コレクションと重複する資料もあるが、前者は両コレクション受入前の収蔵資料であり、後者は当時の取扱説明書と焦点深度表とを付属しており、一式の資料として有用な資料である。当館では、佐々木コレクションの一次受入分と二次受入分で合計 235 点、小久保コレクションの一次～三次受入分で合計 118 点(レンズ付きカメラ及び 8mm シネカメラを含む)のカメラを収蔵する一方、それ以外の登録カメラはまだ 10 点に過ぎないが、諸事情により未登録の収蔵カメ

ラや当館の備品として保管しているカメラもあり、こうしたカメラ類を加えると全部で収蔵カメラは 400 点弱にのぼる数量となっている（複数残存する同一のカメラもある）。また、現在または将来において寄贈を申し込まれる方の存在もあり、今後カメラの点数がさらに増えていくことは間違いないと思われる。

平成 17 年度に小久保コレクション第一次受入分が収蔵されるまでは、登録資料としてのカメラはわずか 2 点に過ぎなかったわけだが（常設展示場で実験装置としてのカメラや装置内に組み込まれているカメラは除く）、平成 18 年度に佐々木コレクションを受け入れ、前出の「昭和のクラシックカメラ」展を開催してからは、当館にカメラが資料として収蔵されていると周知することにつながり、続々とカメラの寄贈申請が相次いだ（ただし、その全てが受入に至ったわけではない）。

筆者が当館に赴任してからは、平成 18 年度と平成 21 年度に合計 6 件・8 点のカメラを受け入れているわけだが、いずれもカメラの展示会開催に合わせて寄贈申請のあったことが受入の契機であった（今回の「カメラの世界」展でも寄贈申請が数件・数十点程度あったが、小久保コレクションの第三次受入分を除き現在検討または整理段階である）。徐々に当館がカメラをコレクションしていることが県民に知られ始めてきていることは事実といえよう。

平成 18 年度以降の 6 件・8 点のカメラの来歴は、親の形見であったり長年しまっておいたままのものであったりというもので、博物館なら展示等でまた活用してもらえらという期待も込められた寄贈であった。点数としては 1 件につき 1～2 点程度なので、その都度整理を行った上、審査会を開催して受入手続きを行ったが、平成 21 年度分には、前述のとおり当館の事情により収集活動が行い得なかった平成 19～20 年度の申込分のもも含まれている。

これらの両コレクション外の登録カメラで主なものを概観してみたい。

諸橋徹氏からの「マミヤシックスⅢ」（写真 19）は、戦後の 1947 年発売のものである。「マミヤシックスⅢ」には戦前版と戦後版のものがあ

り、戦前版と戦後版のものがあ、搭載していることから戦後版と判明した (43)。ただファインダー部分には若干の変更が見られる。当該資料もマミヤ独自のバックフォーカシング機構（フィルム面が前後に移動しての焦点合わせ）を搭載している。



写真 19 マミヤシックスⅢ (番号: 200603008)

なお、諸橋氏からのもう 1 点の寄贈資料は、小西六写真工業における初の 35 mm ハーフ判カメラ「コニカアイ」であるが、35 mm ハーフ判としては後発機ゆえに、他機との差別化を図るために大口径レンズ「ヘキサノン 30 mm F1.9」を搭載し、小型化のために突出部を小さくしたビハインドシャッターを採用している点で特徴的なカメラである (44)。

黒田博夫氏からの「ミノルタベスト」は、前述のとおり当時の取扱説明書と焦点深度表とが付属しているが、コレクション資料のように二次的入手の資料ではなく、黒田氏の父及び本人が使用したカメラであること、発売開始年の 1934 年製造のカメラではなく 1940 年製造のカメラであった来歴の明確さもある点で貴重である。

また黒田氏からは「ニートリリー」（写真 20）の寄贈も受けているが、この資料は 1923 年製のカメラで、国産カメラとしては現時点で当館収蔵カメラの中で最も古いものとなっている。黒田氏の父親が使用していたカメラであり、ロールフィルムの普及により前出の「ミノルタベスト」に世代交代したが、乾板カメラが昭和に入って以降も戦前期には一般的であったことを知られてくれる資料である。その原形はドイツのフォクトレンダー社製「アルピンカメラ」に辿りつくことされ、この

「アルピンカメラ」を模倣して1916年に発売された「リリー2号カメラ」の改良機が「ニートリリー」であり、反射鏡ファインダーの装着やレンズボード部を黒色結晶塗装とする等の改良点が見られた(45)。ドイツ製カメラ模倣時代の国産カメラの好資料といえるであろう。専用の革ケースのほか乾板ホルダーや三脚、レリーズも残されており、当時の写真がカメラを三脚に固定してホルダー装填後にレリーズにより撮影されていたことが一般的であったことも確認できる。



写真20 ニートリリー（番号：200903127）

当館の元副館長である高木博彦氏寄贈の「リコーDC-2」は、初期のデジタルカメラの形態や機能を伝える資料である（写真21・22）。現在の主流機種とは異なる平型ボディに折畳式の液晶モニター（「DM-2」）を取り付け、撮影結果を表示して確認することができる。当該資料で重要なことは、同じ外観の機種に「リコーDC-2L」というカメラがある。当該資料との違いは、「DM-2」が最初からパッケージングされているか別売りで取り付けるものかということであり、当該資料は後者にあたる。つまり、「DM-2」がなくても「DC-2」という商品は成り立つのであり、初期のデジタルカメラは、現在は当たり前となっている撮影結果確認用の液晶モニターを必置とせず発売されていたことを物語っている。資料名を決めるにあたってこの点は要注意である。なお、確認用液晶モニターの搭載（当該資料では装着という表現の方が適切であろう）は、現在のスタイルへの発展途上段階のデジタルカメラと見なすことができるが、画素数の圧倒的増加や機能の多様化・高度化は、20世紀のデジタルカメラと今とで



写真20 リコーDC-2（番号：200903129）



写真21 リコーDC-2（反対側）

は雲泥の差がある。デジタルカメラでは光学系メーカーが淘汰され、エレクトロニクスメーカーが主流となった現実には、そういうところに理由が求められよう。そういう意味で試行錯誤の初期のデジタルカメラは光学系メーカーの奮闘振りを示すものとして面白みがある(46)。

以上のほか、今村妙氏寄贈の「ミノルタフレックスⅡB」や山本博氏寄贈の「キヤノンフレックスRP」も当時の技術を詰め込んだコストパフォーマンス機だが、紙面の都合もありここでは説明を割愛する。しかしいずれも寄贈者にとって思い入れのあるカメラであった。また堀井宏子氏寄贈の「セミオリンパスⅡ」も、高千穂製作所（のちのオリンパス光学工業、現オリンパス）がその定評のあるレンズだけでなく、シャッターやボディも自社生産した最初の機種として同社にとってエポックメーキングなカメラである。

そして8mmシネカメラではなくビデオカメラということで今回は対象としなかったが、平成18年度には鈴木毅氏から「液晶ビューカムVL-H

L3」を受け入れており (47)、ビデオカメラもカメラの一つのジャンルとして捉えれば、さらに対象となる資料は広がるが、ここでは両コレクションに含まれていないこともあり、除外した。

## 5 おわりに

以上、本研究報告第 14 号掲載の拙著「当館のカメラコレクションについて」を補足する意味で、平成 21 年度に受入・収蔵したカメラ関係資料（特にカメラ中心）の概要を中心に記してきた。佐々木コレクションと小久保コレクションの収蔵により、当館はまとまった数のカメラ関係資料を保管・活用する施設の一つとなった。この二つのコレクションの収蔵の契機は全くの偶然であり、それまで当館には登録資料としてのカメラはわずか 2 点しか収蔵されていなかったことからわかるように、平成 16 年度まで積極的に収集していたわけではなかった。また、一口に産業技術資料といっても多岐にわたり、その中でカメラばかりが突出するのは資料の収蔵のあり方としてバランスが悪いのも事実ではある。しかし、個人でカメラをコレクションしている方は多数存在するようであるが、まとまったカメラを収蔵・公開している施設はそれほど多いとはいえない (48)。わが国が世界一のカメラ大国といわれる現在、産業技術資料の一種であるカメラを保存・継承する施設が千葉県にあってもいいのではないかとと思われる (49)。ただ当館の弱点としては、カメラ産業は千葉県の基幹産業には位置づけられないことである (50)。しかし、当館が「現代産業」という名称を冠している以上、これだけ普及しているカメラのあゆみを今に伝える資料群を収蔵している博物館（科学館）であるとしても、全く的外れであるとはいえない。幸いにしてカメラは小型のものが多く、数量の割には収蔵庫をそれほど圧迫するものではないため、保存環境の整備は今後も努めていく必要はあるものの、保管スペースの確保を維持しながら収集していけば、当館ならではのコレクション資料になり得るものと思われる。過去の 3 度の展示会開催における新規来館者層の開拓やマスコミへのアピール、資料収集への機会増大等、当館の活動においても有用な資料群であることも実感す

ることができた (51)。

しかし、当然ながらカメラは工業製品ゆえにその生産個数が夥しいのも避けられない現実である。カメラであれば全て集めるのかという意見やエポック的なもののみを収蔵すればよいという意見、大衆的なカメラの収蔵も含めてこそ他では見られないカメラの宝庫になり得るといった意見や資料価値的に入手困難な資料に限定すべきという意見等、収集範囲については議論の分かれるところではある。いずれにしても、カメラは時代が新しくなるほど世代交代が著しく、クラシックカメラに限定した収集のみではカメラのあゆみ全体を正確に把握することは難しくなっている。「とにかく残す」といった視点の一方で、取舍選択する視点も併せ持つ必要もあり、収蔵状況と併せて受入の可否を検討していくべきであろう。現代の資料（工業製品）を扱う以上、一般の歴史系博物館や美術館等とは異なる資料収集方針を模索していく必要がある (52)。

あくまで個人的な意見だが、当館のようにまだ文化財とは認識されない資料を扱う機会の多い館の場合 (53)、寄贈者の寄贈資料に対する心情としては「もう不要なので」という場合と「大事なものだから」という場合とがある。前者の場合は、主導権は当館にある。「とりあえずの保存」も可能となるからである。カメラを受け入れる場合も、その点についての寄贈者の意思確認は大切である。後者では寄贈者の意思をどれだけ当館が汲み取れるのかが重要である（きちんと残す方向での環境整備を含む）。収蔵空間が手狭になっていたり、類似資料がすでにある場合では、後者の資料受入は困難であろう。逆に産業技術資料としてその資料が産業史（例えばカメラ史）において貴重な資料であり、当館以外で保存する施設が皆無である場合は、後者のケースでも収集を積極的に検討すべきである。

また、当館が博物館資料の対象は唯一無二の資料のみ（これが従来の文化財像に近いであろう）と限定すれば、特に産業技術資料（現代の資料が多く、また工業製品等の大量生産品の側面もある）の収集活動は困難となる。むしろそのような一点ものの資料のみを扱っているわけではないと割り



切り、受け入れた資料に対しても、今後不要となった資料については廃棄することに向き合う勇気も必要である（できるだけそうならないようにすることに越したことはないが）。この点、積極的とはいいつつも、当館における収蔵資料は寄贈者からの申込が前提の資料が多く、中には当館において処分することを了解の上で受け入れている資料もある。カメラも例外ではないが、産業技術資料については、現時点で歴史的評価が未定の側面もあり、また今後の評価の行方（例えば、同一機種で稼動する資料を受け入れたために先行して受け入っていたジャンク資料の収蔵理由の低下や程度の良い資料が入ったことによる状態の悪い資料の収蔵理由の低下等）により廃棄または登録資料から外すことも考えられる。こうした前提を了解の上での受入が行われるよって、博物館資料といえども点数減の可能性があることも考慮していくべきではないか。

当館はカメラ専門博物館ではないゆえに、参考資料も調査研究組織も未整備かつ未熟な点は拭えない。これまで作成した資料目録も未解明な部分がまだあり、今後も補完・整備していく必要がある。そのような中、佐々木・小久保両コレクションの収蔵によって核となった資料群が、当館の収蔵資料に一つの特色を示そうとしてきている。これからも収蔵空間を圧迫しない範囲で着実な資料収集を継続し、切り口を変えながらカメラを活用した収蔵資料展等も計画していきたい。そのためにもカメラに関する資料調査を地道に続けていかなければならない。なお、今回掲示した目録の不備や誤り等、お気づきの点で訂正箇所や指摘箇所等があれば御教示いただければ幸いである。

最後に、佐々木・小久保の両コレクションの旧蔵者である佐々木須磨子様（仲介者：榎美香氏）、小久保勝弘様には厚くお礼を申し上げます。また資料整理では落合昭雄氏に御尽力いただきました。そして佐々木コレクションや小久保コレクションの中には、外国産カメラを中心に製造・発売年が不明なカメラも少なくなかったため、その解明した部分については日本カメラ博物館の山本一夫氏及び宮崎真二氏に大変お世話になりました。改めて感謝の意を表する次第です。

（註）

- (1) 豊川公裕：当館収蔵のカメラコレクションについて「千葉県立現代産業科学館研究報告」14（2008）
- (2) 小久保コレクション（平成17年度受入分は第一次受入分となる）の点数136点、佐々木コレクションの点数279点でその合計は415点となり、この二大コレクションだけで常設展の展示資料等も含めた平成18年度末時点での当館収蔵資料総点数2,096点の約5分の1を占める。前掲豊川「当館収蔵のカメラコレクションについて」参照。
- (3) 「カメラコレクション」展は、「昭和のクラシックカメラ - 佐々木コレクションから -」で紹介できなかったカメラを中心に未展示であった小久保コレクション（第一次受入分）の一部も加え、通史的というよりカメラの時代性・機能や特徴等をテーマに20点程度ずつを各1か月単位で3期に分けて小展示である。この「カメラコレクション」展を含む当館サイエンスドームギャラリー展示については、川端保夫・金田幸代・豊川公裕：収蔵資料を活用したサイエンスドームギャラリーの展示と収蔵資料の管理について「千葉県立現代産業科学館研究報告」15（2009）を参照。
- (4) 当時、当館がその所在する地元自治体の市川市へ移譲される可能性があったため、当館が受け入れても資料等を引き継ぐ市川市の方で不要と判断すればその資料は廃棄されるおそれがあった。そのため当館では資料収集を一時凍結せざるを得なかった。これは当館が現在進行形の資料ともいえる産業技術資料を扱っていること（必ずしも現時点での文化財的資料を扱っているわけではないこと）、対象資料が千葉県にゆかりのあるものに限定されていないといった産業技術資料ゆえの特殊性に大いに関係がある。よって仮預かり状態の資料については、整理を行いつつも最終的には寄贈申込者への返却や寄贈申込者と相談の上での処分も念頭に置かれていた。なお、当館の市川市への移譲は、平成21年度に白紙化された。
- (5) 例えば、カタログ（紙資料のほかCDといった形態のものもある）は当該資料のスペックを知るには好資料であるが、博物館資料とするには拙速ではないかと思われる側面も否定できない。しかし、戦前の製品のカタログとなれば現状でも博物館資料（歴史

- 資料) となり得ようし、今後経年により博物館資料化する可能性はある。よってとりあえず参考資料として保管 (または利用に供する) しておけば、将来改めて登録化を検討することが可能である。この点、当時の熊本県本渡市立天草アーカイブズの本多康二氏が千葉県文書館で講演された際に、現在新聞折込等で配布されているチラシを整理・保存することにより、これが将来民俗的な資料として有用であろうと考えられていることは興味深い一例である (平成 17 年 2 月開催の千葉県史料保存活用連絡協議会主催の平成 16 年度第 3 回研修会にて「市町村合併と公文書保存の取り組み」と題して講演された中での発言)。その講演要旨は千葉県史料保存活用連絡協議会編刊「千葉史協だより」第 21 号 (2005) に掲載されているが、当該部分は紙面記録されていない。なお、当面登録しない資料に関しては、旧蔵者とはよく相談の上で了解を得ておく必要がある。因みに、工業製品カタログの博物館資料化の可能性を論じたものに、坂本永：科学系博物館資料としての工業製品カタログに関する考察「千葉県立現代産業科学館研究報告」13 (2007) がある。
- (6) 収蔵スペースが許せば、とりあえず資料を保管しておく (確保しておく) ことは、資料 (史料) 保存の見地から文書資料 (紙資料) の分野ですすでに行われている。この点については、積極的な活動例として千葉県長生郡睦沢町の歴史民俗資料館が挙げられる。これについては、千葉県史料保存活用連絡協議会編刊「千葉県史料保存活用連絡協議会研修会事業' 98・' 99 公開シンポジウム」(2000) を参照。
- (7) 小久保コレクション (一次受入分) の整理経過については前掲豊川「当館収蔵のカメラコレクションについて」を参照。
- (8) 一群の資料を整理する場合、文書資料 (紙資料) の分野では「原秩序尊重の原則」というのがある (文書館用語集研究会編「文書館用語集」、大阪大学出版会 (1997))。「原秩序尊重の原則」は、整理前の秩序を壊してはならないとの考えであり、「出所の原則」(他の資料群と混同してはならない) と同様、資料群を整理するにあたっての基本的考えであるが、小久保コレクションについては収集資料であり、しかも収集者本人が任意に抽出した資料を収集者本人により当館に持ち込まれたものであることから、「出所の原則」は当然としても、「原秩序尊重の原則」にはこだわらなかった。ただし、持込順の整理・番号付与は行っている。またカメラ及びその周辺資料の先行受入は、秋から開催の「カメラの世界」展に間に合わせるとの当館の事情があった (受入にあたっては、整理のみにとどまらず、その資料についての調査を行って概要把握を行わなければならないため、それ以外の資料についての調査にはさらに時間を要することが懸念されたため)。
- (9) 小久保氏所蔵のカメラは、当館収蔵の小久保コレクションで完結しない。小久保氏の手元に残されているカメラも存在する。そのため、「カメラの世界」展の開催にあたって展示内容をさらに魅力的なものとするため、小久保氏所蔵のカメラの一部を借用・展示している (この点については佐々木コレクションについても同様)。借用資料も展示したのは、カメラ史を跡付けるにあたり、より多彩なカメラの紹介を実現するとともに、展示を通して当館収蔵の小久保コレクションの補完につながることもなった。
- (10) 前掲豊川「当館収蔵のカメラコレクションについて」参照。
- (11) 松尾惣一郎：オリンパスカメラのすべて⑤ハーフサイズカメラ・他 及び萩谷剛：オリンパスカメラのすべて⑥ハーフサイズ一眼レフカメラ (いずれも「カメラレビュー クラシックカメラ専科 20 オリンパスのすべて」、朝日ソノラマ (1992)) 参照。20 機種のうちには輸出専用のラピッド判も含む。なお、「オリンパスペン」シリーズの解説には、同書を主に参考としている。
- (12) 「オリンパスの歩み」(「オリンパスHP」所収) 参照。
- (13) 長野正：ツァイス・イコンのカメラ - わがコレクションの横顔 - 「カメラレビュー増刊 クラシックカメラ専科」、朝日ソノラマ (1978) では、同形の「ポリスコープ」が紹介されており、1920 年と明記されていたので当初はそれに倣ったが、よく見ると小久保コレクションの「ポリスコープ」は、カメラを縦型にした際にメーカー及びカメラ名がレンズボード上面に位置するのに対して、長野氏の「ポリスコープ」は横に位置するという違いがあった。
- (14) ステレオカメラの歴史は古く、世界最初の市販カメラである「ジルー・ダゲレオタイプ・カメラ」発売後間もなく早くも登場しているという。フランス

- のジュメル社がボックス型ステレオカメラの「ヴェラスコープ」を19世紀末に発売し、1920年代まで多数つくられ、「ポリスコープ」はそのコピー機の一つといわれる。以上は高島鎮雄：ステレオ・パノラマ・特殊カメラ「カメラレビュー増刊 クラシックカメラ専科」, 朝日ソノラマ（1978）を参照。
- (15) 「カメラの世界」展開催中、見学者の中に横木製作所の名前を懐かしく語られた方がおられた。また調査でお世話になった日本カメラ博物館でもその存在は承知されていた。
- (16) 小久保氏を仲介者として筆者が写真館経営者から直接聞き取りを行った際に、入手時期は「昭和50年代」との情報を得たが、さらに具体的な年代を聞いたもののそれ以上はよく思い出せないとのことであった。また同じく聞き取りで得た情報は、直接横木製作所から打診を受けて購入したカメラとのことであった。
- (17) 前出(14)の見学者からの情報によると、そのような販売の仕方は通常は行われぬとのことであった。
- (18) 「写ルンです」という商品名は、その初代機から命名されていたようだが、実際のパッケージやボディー部等に当該名称は見当たらない（外装フィルムも含む）。よって今回、目録上では資料名はフィルムの名称であり実際にボディーに記載されている「フジカラースーパー100HR」とし、カッコ書きで商品名を付記した。むしろこの方が、(使い捨ての)カメラではなくレンズの付いたフィルムである、とする富士写真フィルムの商品趣旨に適合しているのではなかろうか。
- (19) 「Mac' nRoll Diary」HP及び「金属機械の魅力」（「Range Finder」HP所収）、「由美と比の趣味の廊下：今月のカメラ 2008年8月号」（「TAKITAROの部屋」HP所収）参照。
- (20) 当館収蔵の「ワイドラックスF7」（番号:200604154）は、撮影レンズが回転して横長の画面を得る本格的なパノラマカメラであるが、これは1977年製である。またパノラマ撮影を行うカメラは1800年代半ばには登場している。後者については、酒井修一：パノラマカメラの歴史「カメラレビュー クラシックカメラ専科 11 コレクターズ情報満載」, 朝日ソノラマ（1988）参照。
- (21) 子安栄信：富士写真フィルムのカメラのすべて「カメラレビュー クラシックカメラ専科 44 富士写真フィルムのカメラ」, 朝日ソノラマ（1997）を参照。なお、子安氏は「フジインスタントカメラFP-L」というように、「フォトラマ」をあえて名称に付けていない（ただし冒頭に「インスタントカメラ（フォトラマ）」と断っている）。
- (22) 白松正：戦後50年の日本カメラのあゆみ「カメラレビュー クラシックカメラ専科 35 日本のカメラ50年 特別号」, 朝日ソノラマ（1995）。
- (23) 日本カメラ博物館運営委員会編「日本のカメラ誕生から今日まで」日本カメラ博物館（1989）を参照。なお「ミノルタα7000」について、発売年については昭和59年としている（日本写真機光学機器検査協会編刊「日本の歴史的カメラ」（1986）でも同様）。しかし「コニカミノルタHP」や「カメラレビュー クラシックカメラ専科 12 ミノルタカメラのすべて」朝日ソノラマ（1988）では昭和60年としているので、小稿では後者に従った。
- (24) 「ミノルタの歩み」（「コニカミノルタHP」所収）の1980年代の説明文参照。
- (25) 「マビカ」という名は、世界初の電子スチルビデオカメラ（ただし試作機）を世に出して以来のソニーのブランド名である。当時すでにフラッシュメモリーやスマートメディアといった記録媒体も登場しているが、「デジタルマビカMVC-FD7」は、フロッピーディスクを使用する点で電子スチルビデオカメラの名残も感じさせる過渡期的なカメラとしての側面も持っていた。
- (26) 前掲子安「富士写真フィルムのカメラのすべて」参照。
- (27) 「写ルンですの歴史」（「写ルンです on the Web」HP所収）参照。
- (28) ドイツ製カメラが日本人の憧れであり日本製カメラの手本であったことは、日本カメラ博物館運営委員会編「ドイツのカメラ展」図録、日本カメラ博物館（1990）の日本カメラ博物館長・森山真弓氏のあいさつ文に次のように明記されていることから窺える。
- 「ドイツのカメラといえば、長い間日本人のあこがれの的でした。第二次世界大戦前は、ドイツの高級カメラの値段はとて高く、東京で一戸建の家と同じくらいだったといわれています。しかし、それでも、写真の好きな人は、いつかドイツのカメラを

買いたいと夢見たものです。

ドイツのカメラはまた、長い間日本のカメラのお手本でした。日本のカメラメーカーは、特に、今もなお世界のカメラのリーダーのひとつであるライカに追い付き、追い越すことを目標にしてきました。今日、日本のカメラが世界一といわれるようになったのも、このようなすばらしいお手本があったからこそです。(以下略)

- (29) 例えば「ライカ」に関する評価としては、「ライカ」の趣味に関する著作や講演で有名なカメラマン・田中長徳氏の次のような発言に集約されるのではなからうか(田中長徳「くさってもライカ」、アイピーシー (1994))。

「ライカほどその知名度が高いカメラはない。これは今でもそうである。ライカという名前には単なるブランドを超えた信仰とでもいえる強さがある。ドイツは精密高級カメラの国である。そのイメージは現代でも変わらない。そのなかでもライカの名はコンタックス、ローライなどドイツの優秀カメラの中で抜きん出ている。(以下略)」

- (30) 例えばライカ通信編集部編「M型ライカヒストリーブック」、柘出版社 (2003) の見出しに「往年のライカカメラは大きくわけると3種類」とあるように、ライカがそのボディ構造により大きく3種類に分かれるとする見解は諸書に見られるとおりである。また、現在のライカカメラ社(エルンスト・ライツ社の後身)に展示されている「ライカツリー」(系統樹。各「ライカ」を系統的に展示)でもこの3系統に分類されている。
- (31) 「ライカ I (A)」の名称については、前掲「ドイツのカメラ展」図録の表記を基にしている。ここでは、初代機については従来「ライカA」や「ライカI」という表記が見られたが、「国際的にはI型のタイプAといているので」今後は「ライカ I (A)」と表記することにしたとある。小稿でもその考えに従った。
- (32) 片山良平：バルナック型ライカ図鑑「カメラレビュー クラシックカメラ専科 24 バルナック型ライカ図鑑」、朝日ソノラマ、平成5年) 参照。以下、バルナック型ライカに関するデータは本書によっている。
- (33) 前掲白松「戦後50年の日本カメラのあゆみ」参照。

- (34) 「ライカを買おう」HP参照。

(35) 列記中、12) までは片山良平：M型ライカ図鑑「カメラレビュー クラシックカメラ専科 28 M型ライカ図鑑」、朝日ソノラマ (1995)、13)・14) はライカ通信編集部編「M型ライカヒストリーブック」、柘出版社 (2003)、それ以降は「ライカを買おう」HPを参照。なお、特殊型の「MP」や記念発売の「M6 J」等も含め、一部省略したものもある。なお、当館のM型ライカの情報に関してはこれらの書籍・HPを参照している。

- (36) 前掲片山「M型ライカ図鑑」参照。

(37) 前掲日本カメラ博物館運営委員会「日本のカメラ誕生から今日まで」参照。

(38) なお、片山氏は前掲「M型ライカ図鑑」において、「CL」のことを「厳密にはM型シリーズとは別の系統に属するカメラと思われるが、昨今のコンパクト・ライカ群とは明らかにコンセプトが異なるし、Mマウントを備えているので、本稿では一応M型ライカの一員として取り上げた」と断っている。

- (39) 前掲ライカ通信編集部編「M型ライカヒストリーブック」参照。

(40) 片山良平：表で見るライカフレックス/ライカRのすべて「カメラレビュー クラシックカメラ専科 41 R型ライカのすべて」、朝日ソノラマ (1997) 参照。R型ライカについては同書を参考とした。なお、16) のみは「ライカカメラAG」HP所収の「製品の歴史」を参照。

- (41) 高島鎮雄：ミノルタ 35mm 一眼レフカメラ「カメラレビュー クラシックカメラ専科 12 ミノルタカメラのすべて」、朝日ソノラマ (1988) 参照。
- (42) 前掲高島「ミノルタ 35mm 一眼レフカメラ」参照。

(43) 鈴木佐太郎：マミヤカメラのすべて マミヤシックス「カメラレビュー クラシックカメラ専科 36 マミヤのすべて」、朝日ソノラマ (1995) 参照

(44) 菱田耕四郎：小西六のカメラヒストリー⑩戦後のカメラ「カメラレビュー クラシックカメラ専科 10 小西六カメラの歴史」、朝日ソノラマ (1987) 参照。

(45) 菊岡清：小西六のカメラストーリー③明治41年～大正12年「カメラレビュー クラシックカメラ専科 10 小西六カメラの歴史」、朝日ソノラマ (1987) 参照。

- (46) 日本カメラ博物館では、2007年10月に「デジタル

カメラ ヒストリー」と題した特別展を開催し、1981年の電子スチルビデオカメラ時代からのデジタルカメラのあゆみを歴史的に位置づけようと試みている。こうして振り返ると、携帯電話における「写メール」を先駆けとしたカメラ付き携帯電話の発展も今後カメラ史にどのように位置づけるのか、さらなる検討を要するところである。

- (47) 「会社情報・シャープの歩み」（「SHARP」HP所収）の社史・1993年の項目では、「92年10月、全く新しい概念のビデオカメラとしてデビューしたビデオカメラ、液晶ビューカムは、その使いやすさで、一気に市場シェアをアップ、ムービー業界を変える大ヒット商品となり、92年の『日経優秀製品・サービス賞』では、約1万3千点の中から、最優秀賞16点に選出されました」と謳っている。「液晶ビューカム」のヒットにより、液晶モニターを見ながら撮影するスタイルが定着しやすくなった。当館で受け入れた「VL-HL3」は最大16倍の瞬間ズーム機能や電話回線での映像の送受信も可能とした1994年発売の後継機である。
- (48) わが国におけるカメラ収蔵・公開施設としては、日本カメラ博物館（東京都千代田区）をはじめとして、ペンタックスカメラ博物館（栃木県益子町。ただし平成21年7月閉館）や末廣クラシックカメラ博物館（福島県会津若松市）、ミュゼふくおかカメラ館（富山県高岡市）、桐生市郷土資料展示ホール（群馬県桐生市）等がある。また、平成22年3月9日付け「日本経済新聞」朝刊において、大手家電量販店のヨドバシカメラが3月末閉館の新宿厚生年金会館の敷地・建物を買い取り、古いカメラや写真を展示する博物館を開館する計画を立てているとの記事が掲載された。
- (49) 千葉県内では、銚子市に個人による銚子カメラ博物館が平成22年3月末に開館することとなった。
- (50) 経済産業省経済産業政策局調査統計部編刊「平成16年 工業統計調査 産業細分類別統計表」（2006）によると、千葉県の「写真機・同附属品製造業」の企業数は3、同製造出荷額は約412百万円となっている。同年のわが国の「カメラ・交換レンズ」の総出荷額をカメラ映像機器工業会編刊「平成21年版 日本のカメラ産業」（2009）から求めると、1,599,990百万円であることから、単純に比較はできないが、

カメラ産業に占める千葉県の割合は高くはない。

- (51) 例えば「カメラの世界」展の場合、取材のあった新聞社は、「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」「千葉日報」「サンケイリビング」に及び、テレビでは「千葉テレビ」の撮影があった。このため、アンケート結果を見ても「カメラの世界」展への来館契機のトップは「新聞等で見て」というものであった（全体の28%）。また見学者層は、当館における小学生以下の子供を連れたファミリー層という従来の一般的来館者像より、65才以上を中心とした年配者層が中心であった（アンケートの年齢層別記入者では65才以上がトップの33%を占めた）。これは当館にすれば新規来館者の開拓につながったことを意味するものといえる。またそして見学者の評価は「とてもおもしろい」「おもしろい」で合計99%を占めており、カメラに関心の高い人が多く来館されたことも窺える。
- (52) 当館の高木博彦元副館長は、平成8年10月の「国宝および重要文化財指定基準」の改正によって対象の歴史資料分野に「科学技術」の項目が加わったことに注目し、今後産業技術資料を含めた科学資料の文化財化に言及している。その際、科学技術資料ならではの動態保存の必要性を論じているが、さらに複数の館が同一資料を保管している場合には、「一点は現状保存に徹し、他を動態保存や機能保存にあてることが可能である」として、博物館（科学館）の横のつながり（情報共有）の必要性についても説いている（高木博彦：博物館における工業資料の保存・管理について - 科学技術分野の重要文化財指定に関連して - 「千葉県立現代産業科学館研究報告」12, 2006）。大量生産品の側面もある産業技術資料の保存のあり方として一つの方向性を示しているといえよう。
- (53) 同じ科学館でも、自然史系と理工系とでは資料収集のあり方も異なる。特に理工系の場合は、博物館資料としての登録に向かない実験装置系や体験装置系の資料が多く、中には収蔵資料はない、とする科学館も少なくない（当館職員の県外施設視察結果等による）。当館の場合は「現代産業科学館」として産業技術資料を「収集・保存活動」の対象として扱っている（千葉県立現代産業科学館編「千葉県立現代産業科学館（概要）」、（1994）を参照）。